

ウガンダ南西部の人口稠密地域における斜面農耕と森林利用に関する研究

平成 26 年入学
派遣先国：ウガンダ共和国
堀 光順

キーワード：斜面農耕, 土壌浸食, 人口問題, 土地利用

対象とする問題の概要

ウガンダでは急速に人口が増加している。2002 年の人口は 2400 万人であり、1992 年から 2002 年までの人口増加率は 3.2%であった。2002 年において、ウガンダの全人口における農村人口の割合は約 88%であり、農村部における人口が急速に増加していることが分かる。農村部における人口増加は農産物の増産による耕地の拡大と燃料である薪の採取によって森林の減少を引き起こしている。人口の急速な増加は、1 人あたりの農地面積の狭小化をすすめ、作物生産の減少と食糧不足が発生することも懸念される。ウガンダ南西部の山岳帯では、薬用植物の利用が報告されており、森林の伐採は植物利用にも大きな影響を与えらる。

研究対象地域であるウガンダ南西部の標高は 1,220m から 2,350m の起伏がある高原地帯となっている。元より斜面地では、雨水による土壌浸食、斜面崩壊や地滑りが発生しやすい問題を抱えている。調査地では、斜面地を利用した農業が営まれており、耕作地の拡大は土壌浸食や斜面崩壊、地滑りなどの災害を多く誘発する可能性がある。

研究目的

本研究の目的は、ウガンダ南西部の高地における住民の農地利用および、森林を活用した傾斜地における土壌浸食の在来技術を調査すること、そして人びとの植物利用を明らかにすることである。研究対象地域であるカバレ県の主な生業はモロコシやトウモロコシ、ジャガイモなどを栽培する農業とウシやヒツジ、ヤギの補助的な牧畜がおこなわれている。カバレ県の人口密度は 1 km² あたり 275 人であり、ウガンダ国内において人口の稠密地域といえる。このように標高が高い地域でありながら、人口が集中しており、山地斜面を利用した農業が営まれている。しかし、急速な人口増加や都市むけの商業栽培の進展により近年、開墾された耕作地の面積が大幅に増加している。本研究では、傾斜地で住民がどのような農耕を営んでいるのか、人口稠密地域における土地利用の変遷と地域住民による斜面の土地利用、とくに森林を活用した土壌浸食の防止策といった自然資源との関連について明らかにする。

フィールドワークから得られた知見について

2014年8月11日から11月8日までの90日間、ウガンダのカバレ県の農村 R 村にて調査を実施した。この期間は乾季の終わりから雨季の中頃に相当する。住民の主な生業は農業である。乾季には換金作物のジャガイモを湿地の畑で栽培し、雨季には自給用としてモロコシやサツマイモ、マメを斜面地で栽培している(写真 1)。

このジャガイモの栽培には、多くの賃金労働者が雇用されていた。収穫期には、賃金労働者がジャガイモの収穫と倉庫までの運搬作業を行っていた(写真 2)。これらの仕事は重労働であるが、女性とその子どもが中心に作業に従事していた。これらの賃金労働者のなかには隣のキノロ県や隣国のルワンダから来ている者も多かった。



写真 1 斜面地における耕作地



写真 2 収穫したジャガイモを運搬する労働者

雨季の調査村では、毎日のように、午後に 4~6 時間にわたって雨が降りつづく。そのうち、約 1 時間は雨が激しく降る。斜面地では激しい降雨により斜面上部から石や土が流れ、谷部の畑では土壌浸食が激しく、再び畑を耕す必要があった。降雨による土壌浸食を防ぐために斜面地では階段耕地が整備されていた。また、畑の上部に溝を掘り、水路を設けることで、畑に流入する水を防いでいた。湿地帯の畑は雨季に浸水するため、畑を作物の栽培に利用できないことが明らかになった(写真 3)。

調査村における土地は希少である。各世帯が保有する土地の相続は父系で相続がおこなわれ、原則、父から息子へ土地が贈与される。息子の人数にもよるが、土地の相続によって、一人あたりの耕作地の面積は減少する。結果、各世帯は十分な耕作面積を確保するために、林地を伐採して耕作地を拡大していた。斜面地の上部に開墾がすすむ一方で、耕作地が頻繁に売買されていた。

調査地域のおもな燃料は、薪である。一部の斜面地ではアカシア (*Acacia mearnsii* De Wild.) やメキシカンパイン (*Pinus patula* Schiede & Deppe) を燃料や建材に利用するために、植林がすすめられていた。植林は資源の確保のみならず、地力の回復を目的にすることも多いが、前述のように多くの農民は農地を拡大する必要がある。そのため、植林をする人々は地主であったり、子どもが首都のカンパラで働いているといった土地に余裕のある人に限られていた。



写真 3 雨季における湿地のジャガイモ畑

今後の展開・反省点

今回の調査では、おもに調査村の概要や土壌浸食の被害、湿地と斜面地の土地利用について明らかにすることができた。

調査村において、もっとも大きな問題は村内の経済格差が大きいことである。その要因は、保有する耕作地の大きさの違いにあると考えられる。貧困層の子供の多くは学校に通うことができず、賃金労働に従事せざるを得ず、得た賃金を食料の購入に充てている。人口増加によって耕作地が不足する現状における、土地の売買や相続について細かく調査をすすめていきたい。また、R村の外へ移出する人についても調査をしていきたい。

調査地においては、森林の利用についてはあまり見受けることができなかった。しかし、人びとは休耕地からアマランサス(*Amaranthus graecizans* L.)やオニノゲシ(*Sonchus asper* (L.) Hill)を摘んで食用に利用していた。これらの野草利用について、複数の家庭で調査することと乾季における野草利用のデータを収集したい。